

辛 苦 超 え 相 愛 す べ し

ともに生きて

賀川豊彦 活動開始100年

賀川豊彦は、関東大震災の翌年の1924（大正13）年、過労で静養することになり、東京郊外の松沢村（現・世田谷区）に居を構えた。ここが、ついのすみかとなった。

孫の賀川督明（56）は神戸市東灘区に育ち、居間に、賀川が記した掛け軸が掲げられていたという。

「愛する者よ 我ら相愛すべし／愛は神より出づ 凡そ愛ある者

家族

は／神より生まれ 神を知るなら」
住居はとうになく、掛け軸は今、跡地に建てられた賀川豊彦記念・松沢資料館に保管されている。督明は「賀川が常に祈り、願いとして持ち続けていた言葉なんだと思う」と話す。

家族らに松沢での暮らしぶりや賀川の思い出を聞いた。

督明は「晩年、病の床に伏せているイメージが強いが、手を握

質 素 な 生 活 一 体 で 支 え る

ってくれた時の感触は忘れられない」と振り返る。

賀川の次女初井梅子（80）は米国ワシントン州シアトル在住。家族そろって必ず食事をしたことを懐かしむ。「父はあまり食べない人だった」と言う。

本家筋の磯部浩二（77）は徳島県鳴門市に50（昭和25）年、賀川の勧めで日本大学経済学部に進学し、4年間、松沢の家の下宿した。磯部もまた、「（賀川の）食事は本当に質素で、パンが一切れか二切れ程度。静かに、かみしめるように食べていた」と話す。

ベストセラーとなった賀川の自伝的小説「死線を越えて」の印税や、社会事業の資金管理はすべて、妻のハルが取り仕切った。「常に通帳を20冊くらい持っていた」と

梅子。

賀川はあちこちで寄付や援助を約束してくる。ハルは資金を工面するため、自宅の蔵書売り払いに行くこともあったという。

賀川が詠んだ妻恋歌がある。「百万金を手にしつつ 襦袢のそで口つくろいて／人に施す 妻恋し／財布の底をはたきつつ 書物数えて 売りに行く／無口な強き妻恋し／病める夫の 手をひきて／みめぐみ数ゆる妻恋し／これだけが 私の／あなたへの クリスマスプレゼントです（抜粋）」

「ハルは賀川の活動すべてを理解し、賀川もまたハルを信頼していた。だからこそ苦勞にも耐えられたのだろう」と督明。

督明は10代のころ、周囲が「賀

川の孫」に期待するのに反発し、バイクで暴走したり、家出をした。現在はグラフィックデザイナーとして活躍中だ。

今年、賀川の神戸で活動開始100年に合わせた記念事業を展開することになり、「格差社会の解消を願った賀川の思いを後世に伝えていこう」と決意。中心メンバーの一人として全国を飛び回っている。

1日に完成した「新・賀川記念館」（神戸市中央区吾妻通5）の館長に就く予定だ。「人の痛みに寄り添う賀川の姿勢を大切に、積極的に社会活動に取り組みたい」。督明は決意を新たにしている。

敬称略
（河尻 悟）



⑤ 来年4月、賀川記念館館長に就く賀川督明さん。神戸市中央区吾妻通5（撮影・岡田育磨）
⑥ 幼少期を過ごした鳴門の地に建つ賀川の墓。磯部浩二さんは賀川の思い出を胸に、墓を守り続ける（徳島県鳴門市（撮影・中西大二））